

『相高野球部』が復活する迄^(※1)高普第8回卒 管野 寛^(※2)

今、プロ野球読売巨人軍で活躍している、鈴木尚広^(※3)選手も高校時代在籍して居た、今ある我が相高野球部が此処迄に来るには、大きな挫折の時代があった事を、半世紀前を振り返り、思い出し乍ら綴ってみようとペンを執りました。中には処々思い違いをしている箇所もあろうかと思いますが、そのところは御容赦の程お願い致します。

私が憧れの相高へ入学したのは、1953 (昭和 28) 年 4 月、当時の校舎は木造平屋建 3 棟が川の字形に並び、私達普通科 1 年生は一番奥北側で、至極寒々とした教室であったと、古稀を過ぎた今でもはっきりと覚えています。

入学した当初、野球部は部員による不祥事が原因とかで廃部中でしたが熱心な 2 年生の有志が中心になり、野球部復活を期して野球同好会をつくり、会員募集中でした。

中学校当時、野球部に在籍していた事を知ってか勧誘され、私達中村第二中学校から 5 人も入会、同好会員数は総勢 15 人ぐらいたったと記憶しています。

以前の野球部のグラウンドはその後、サッカー部の練習場になっており、野球部の練習は二の丸グラウンドか長友グラウンドを借用して、ボールが見えている限り皆んな一生懸命汗を流し練習に励んだものです。

中でも最も感銘した事は、同好会の部長?に就任して頂いた美術の鈴木琢磨先生^(※4)の熱意でした。先生はそれ迄絵筆しか持ったことがなく、全く野球否、スポーツとは縁の無かった人が、毎日のようにノックバットを持ち、馴れない手つきで私達にノックをしてくれた事です。恐らく手の平、指には豆が潰れていたことと思われます。

そんな先生とひたむきな会員の練習振りが認められたのか、その年の夏頃には晴れて野球部として認められ、復活したのです。皆な喜び、練習に一層力が入ったものです。それに此の頃から、晴れて対外試合にも出られるようになったことです。

そして、遂に思ってもみなかった事が起きたのです。それは私達 1 年生の秋、新人県大会、試合の会場は郡山市の開成山球場と覚えています。途中の経過は忘れてしまいましたが、どうした事か我が相高は準々決勝迄進み、対戦相手は、当時野球では名の知られた「会津若松商業高校」であったと記憶しています。

生憎、試合当日の朝迄雨が降って居り、中止かと思ひ、開成山競馬場近くの宿泊所で待機していたが、雨がやみ、私達は宿舎を出て球場へ行ってみると、グラウンドは水びたし、係員達はグラウンドにスコップであちこちに穴を掘り、バケツで水を汲み出し又、グラウンドにガソリンを撒き火を付ける等して何とか試合の出来る状態にして頂き、当日延期される事もなく試合は出来たのです。

残念乍ら我が相高は惜敗したのですが、僅か1年足らずしてベスト8迄行けたなんて、然も部員15人そこで、信じられますか？でも事実だったのです。半世紀過ぎた今でも鮮明に私の脳裏に焼き付いています。

もう一つどうしても忘れる事の出来ない思い出があります。

前にも記したように野球部の練習場所は主に二の丸球場を使用していたのですが、今も残っていると思うのですが球場の周囲はお壕になっており、フリーバッティングの練習時ファールボール等がバックネットを越した後方へ飛んで行くと、お壕の中へ落ちてしまう。

1年生の私達は急ぎ竹竿でボールが沈む前に拾う事が一大仕事だったのです。

又、通常に練習時に使用するボールは縫い目が所々切れているものが大半であった為、その日の練習が終ると縫い目のほつれたボールを何個か家に持ち帰り、夜ボールを繕い翌日又、学校へ持って返るの繰り返しでした。その位当時、ボールは高価なものであったのです。

今の球児には想像だにすら出来ない事ではないかと思うのです。

私が今、この様に元気で居られる事又、支部の世話役として居られること等、これらの全てが当時体験した諸々のことが今の自分をしっかりと支えてくれて居ると強く確信しています。

最後に今学窓に居られる後輩達よ、君達は今、最も多感な世代の中に居り、最も不安定な年代の渦中に居ることをしっかりと抱き止め、夫々の部活動で養われた忍耐と根性とそして努力することの大切さに自信を持ち、力強く前向きに、一步一步確実に進んで下さい。必ずや道は拓ける！と信じて。

(※1) 創立110周年記念誌『紅の旗』(2009(平成21)年1月発行)「思い出の記」(ああ、我々が青春の日々よ)より。

(※2) 昭和31(1956)年卒、中村二中出身。

(※3) 相高普第49回、平成9(1997)年卒、中村出身。

(※4) 相中第39回、昭和16(1941)年卒。大田出身。相馬高校教諭(昭和23~32年)美術。

私の相高生時代^(※1)

高普第8回卒 管野 寛

昭和 28 年春、まだ 15 歳になったばかりの少年は初めて、県下の名門「県立相馬高等学校」の門をくぐった。当時の相高の実態は「ひど過ぎる」の一言に尽きる思いであった。校風は乱れ、校舎はまるで鶏小屋か牛小屋かと間違われてもおかしくない程の荒れ放題で、上級生たちは廊下を高下駄を履いたままで「カランコロン、カランコロン」と平気で闊歩している有り様、なにしろ生徒に注意できる先生は、グック先生こと松田先生と数学の西^(※2)先生ぐらいしかいなかったのでは、と思う。

入学した当時、野球部は廃部中で、2 年生の森田先輩たちが中心になって復部の請願中であつたらしく、間もなく野球同好会としての活動を学校側から認められた。とにかく同好会員の人数集めが最優先であつたことから、中学生時代野球部に在籍していた 1 年生は、片っ端から声をかけられ、私もその一人で中学時代一緒に野球をやってきた早川君ら 5 人と入った。それでも部員(?)は、総勢 14 人しかいなかった。復活初代の部長には、野球とはまったく無縁であつた美術部の鈴木琢磨^(※3)先生が就任され、毎日真新しいユニホームを着て練習に見えて、自らもノックの練習に懸命であつたことが今でも鮮明に頭に浮かんで来る。雨が降らない限り練習は休まず、ボールが見えなくなるまで続いた。

練習場所も廃部中に相高グラウンドはサッカー部に占領され、ある時は「二の丸グラウンド」、またある時は「長友グラウンド」、サッカー部の練習の無い日は相高グラウンドへ行き、石ころを拾いながらの練習であつた。ただ、うれしかったことは秋の県大会に出場、郡山市開成山球場で準々決勝まで進み、対戦校は当時強豪と言われた若松商業高、敗れはしたがベスト 8に残れたことだ。結局、これが学校側に認められて、晴れて相高野球部として名実ともに復活、部予算ももらえるようになり、以後今日にいたっている次第。毎年 7 月になると高校野球全国版の福島県の結果に目がいてしまう。

残念ながら自分は 3 年生の春、進学希望のため、お世話になつた野球部をやめたが、今まで一緒に苦楽をともにしてきた球友たちには、どうしても自分から言えず、鈴木先生に手紙でお願いしたことを覚えている。そんなこともあり、石にかじりついて大学に合格してやるという信念で一年間がむしやりに頑張れたのも、野球部に在籍中培われた根性の賜物と思つている。

3 年生最後の期末試験の時のみ、底板のない机と椅子を持って新校舎に入らせてもらったことが懐かしく思われる。今はそれも壊され、さらにすばらしい新校舎の建設が進み、校風も変わろうとしている。時の流れを痛感する次第だ。
(「茨城支部四十周年記念報」平成 15 年より)

(※1) 相馬高校百二十周年記念誌『乗り越えて その先へ』(2018(平成 30)年 10 月 20 発行

「卒業生からの寄稿」〈馬城会茨城支部会報〉から。

(※2) 西丈夫 相中第 30 回、昭和 7 (1932) 年卒、中村出身。相馬高校教諭 (昭和 21~35 年) 数学。

(「相中相高百年史」資料編から類推)

(※3) 相中第 39 回、昭和 16 (1941) 年卒。大田出身。相馬高校教諭 (昭和 23~32 年) 美術。

(転記&※脚注 村山)